

## 次期学習指導要領に向けた埼玉県の取り組み

# 多様な資質・能力の育成を目指す 指導と評価の確立に 小・中・高合同で取り組む

2020年度に小学校、21年度に中学校、22年度に高校の次期学習指導要領が実施される（高校は年次進行）。小・中・高で一貫している点の1つが、思考力・判断力・表現力や学びに向かう力といった資質・能力の育成だ。埼玉県立総合教育センターでは、多様な資質・能力の育成を目指す指導と評価の確立に向けて、小・中・高合同の調査研究を推進している。調査研究の概要と、その成果を反映させた同県立鴻巣女子高校の実践事例を見ていく。

## 調査研究事業の概要

## 指導主事と現場の教師の協働により、 先進的な調査研究を行う体制を整備

### 思考力・判断力・表現力の 育成を目指した指導改善

埼玉県立総合教育センター（所長・羽田邦弘氏）では、県内の小・中学校、高校の教師の指導力向上を目指した事業を推進している。その1つが、教育課程担当や情報教育推進担当といった同センターの各部署がテーマを設定し、2年間をかけて行う調査研究事業だ。同センターから委嘱された小・中・高の教師が研究協力委員となり、同センターの指導主事と協働しながら、調査研究に取り組んでいると、同センターの古川治夫副所長は述べる。

「指導主事は、現場の課題をよく理解しています。また、全国的な研修等に参加する機会に恵まれており、そこで先進的な事例に出合うことも少なくありません。指導主事が研究協力委員と力を合わせれば、質の高い調査研究になると考えています」

教育課程担当の調査研究を見ていく。2018年度からは、「新しい時代に求められる資質・能力を育むための、『目標、内容、指導、評価』の一体化」をテーマとする調査研究を行っている（図1）。取り組みを始めるにあたっては、教科ごとの部会を小・中学校合同で10、高校で7つ設置し、各部会に所属する研究協力委員を委嘱した。テーマ設定に込めた思いを、教育課程担当の篠田俊文指導主事は次のように語る。

「小・中・高の次期学習指導要領では、思考力・判断力・表現力や学びに向かう力といった多様な資質・能力の育成に重点が置かれています。小学校の次期学習指導要領が全面実施される20年度までに、それらの資質・能力を適切に育成する指導や評価の方法を確立し、現場の指導改善に貢献したいと考えました」

1年目である18年度には、思考力・判断力・表現力の育成と評価を重視



埼玉県立総合教育センター  
副所長  
**古川治夫** ふるかわ・ちかお

埼玉県立総合教育センター  
教育主幹・主任指導主事  
**山崎正義** やまざき・まさよし

埼玉県立総合教育センター  
指導主事(高校・数学科)  
**篠田俊文** しのだ・としふみ

埼玉県立総合教育センター  
指導主事(中学校・外国語科)  
**賛田悠** さいだ・ゆう

## 図1 教育課程担当の調査研究の概要

### ◎目的・目標

- (1) 児童・生徒の資質・能力の育成に向け、次期学習指導要領の方向性を十分に踏まえながら、「目標、内容、指導、評価」を一体化させた実践を目指す。
- (2) 研究会などを通して、同センターの指導主事と研究協力委員が、国や県の最新の動向や研究協力委員の勤務校(研究協力校)の課題などを共有し、協働しながら、研究協力校の課題解決を目指す。
- (3) 同調査研究で得られた成果や知見を県全域・全国へと発信し、教育改革の一翼を担う。

### ◎実施計画

- ・期間 2018～19年度の2年間。
- ・研究協力委員の委嘱 同センターが、指導改善などに意欲的に取り組んでいる教師61人(小・中・高合計)に研究協力委員を委嘱。

### ◎部会の構成

- ・小・中学校の10部会 ①国語/②社会/③算数・数学/④理科/⑤音楽/⑥図画工作・美術/⑦技術・家庭/⑧体育・保健体育/⑨外国語活動・外国語/⑩道徳  
※各部会には、小・中の研究協力委員2人ずつと指導主事1人の計5人が所属。
- ・高校の7部会 ①国語/②地理歴史・公民/③数学/④理科/⑤保健体育/⑥外国語/⑦家庭  
※各部会には、研究協力委員3人と指導主事1人の計4人が所属。

\*埼玉県立総合教育センターの資料を基に編集部で作成。

「研究協力委員は、本センターでの調査研究の成果を自校での指導改善に生かしています。研究協力委員の実践が原動力となり、全校体制での指導改善につながる学校も少なくありません。そうした学校を増やすことで、先進的な取り組みを県内全校へ浸透させ、よりよい教育を実現していきたいと考えています」

調査研究事業の展望をこう語る。  
「研究協力委員は、本センターでの調査研究の成果を自校での指導改善に生かしています。研究協力委員の実践が原動力となり、全校体制での指導改善につながる学校も少なくありません。そうした学校を増やすことで、先進的な取り組みを県内全校へ浸透させ、よりよい教育を実現していきたいと考えています」

し、研究協力委員は自校での指導計画を練り上げるとともに、思考力・判断力・表現力を評価するためのパフォーマンス課題とルーブリックの作成を目指した。各部会では年5～6回の研究会を設け、進捗状況や取り組みの工夫、課題などを共有し、相談し合う機会とした。教育課程担当の賛田悠指導主事は、こう話す。  
「研究会では、児童・生徒にどのような資質・能力を身につけさせたいのかといった根本的な議論から始まり、指導や評価の具体的な方法の検討に進んでいきました。研究協力委員は、互いの実践について議論をする中で刺激を受け、自校での調査研究の工夫につなげていました」

## 19年度の目標を共有すべく、全部会合同の研究会を実施

2年目となる19年度には、思考力・判断力・表現力に加え、知識・技能、学びに向かう力などを総合的に育成する指導や評価の方法の確立を重点目標として掲げた。

「可視化しにくい資質・能力を育成・評価するためには、児童・生徒に外化(アウトプット)させることが重

要です。思考力・判断力・表現力の育成・評価の研究を通じて得た18年度の成果を生かし、外化(アウトプット)の方法や機会を充実させていきたいと考えています」(篠田指導主事)  
そうした目標を研究協力委員間で共有し、研究の目線合わせを図るため、19年5月に全部会合同の第1回研究会を同センターで実施した。最初に、篠田指導主事が19年度の調査研究のねらいを改めて説明した後、特別講師として招かれた桐蔭学園の溝上慎一理事長が基調講演を行った(写真)。溝上理事長は、科学技術の発展などに伴って急速に変化してい



写真 溝上理事長による基調講演では、主体的・対話的で深い学びの重要性も述べられた。その視点を取り入れた指導改善を推進するポイントの1つとして、管理職のリーダーシップが挙げられた。

# パフォーマンス課題とルーブリックで生徒の実態把握を強化し、指導改善を推進

## 保育科の実習を生かし、生徒の学習意欲を高める

埼玉県立鴻巣女子高校は、普通科・家政科学科・保育科から成る学校だ。生徒の多様な希望進路を実現できるように、全校を挙げて教科指導の改善などを推進している。そうした中、数学科の東條滋先生が、18年度、埼玉県立総合教育センター教育課程担当の調査研究の研究協力委員となり、数学における思考力・判断力・表現力を測るためのパフォーマンス課題とルーブリックの作成に取り組んだ。

3年生が2学期に学習する「数学Ⅰ」の「データの分析」を選んだ。

「本校の保育科の3年生は、『数学Ⅰ』で『データの分析』を学ぶ時期に、近隣の幼稚園で『保育実習』を行います。そこで、実習先から園児の身長・体重のデータを提供してもらい、それらを用いて標準偏差や相関係数を求める活動を授業に取り入れることにしました。自分が交流した園児のデータであれば、生徒の学習意欲は大きく高まります。そうした状態にした後、パフォーマンス課題に取り組みせようと考えました」(東條先生)

2つめの方針は、ルーブリックの作成にとどまらず、改善し、評価の妥当性と信頼性を高めること。それには、そのルーブリックを誰が用いても同じ評価結果になるよう、評価の尺度や基準が客観的で適正なものになっているかどうかを検証する「モデレーション」が欠かせない。そこで、各校でパフォーマンス課題を実施し

図2 数学科のパフォーマンス課題(上)とルーブリック(ともに抜粋)

4 下の表はバスケットボールの練習で10回中何回シュートを決めたかまとめたものです。あなたが監督だとしたらAさんとBさんのどちらをレギュラーにしますか。今まで勉強してきた知識を用いて、理由もあわせて答えなさい。

セット	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
Aの回数	7	3	6	4	8	7	7	5	7	6
Bの回数	9	7	2	8	6	3	4	7	9	5

問4は、考えの根拠を述べさせる問題。分散や標準偏差といった既習内容を活用し、論理的な説明ができるかどうかを測るために出題した。

	数学的概念	数学的モデル化	数学的表現
観点の説明	数量や式に関する基礎的な概念や原理・法則などについて理解し、知識を身につけている。	問題が理解できている。	数の計算、目的に応える。
3	・指定された語句を適切な表現で説明することができる。	・複数の代表値や散布度を用いて2つのデータを比べることができる。特に、標準偏差を用いて比べることができる。	・結論を導くために分布度の計算が正しい。
2	・指定された語句を適切な表現で説明しようとしているが、一部誤りがある。	・複数の代表値や散布度を用いて2つのデータを比べることができる。	・結論を導くために分布度の計算を行っている。

\*学校資料を基に編集部が一部改編。数学科のパフォーマンス課題とルーブリックの全体は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」でご覧ください。

## 研究会での議論の中で改善したルーブリック

東條先生は、研究会を通じて、思

考力・判断力・表現力を客観的に測るための課題や評価の尺度、基準を検討しながら、パフォーマンス課題とルーブリックを練り上げていった。パフォーマンス課題は、基礎的な用語の意味を説明させる問題から、既習内容を組み合わせる考えたり、

た後、研究会でモデレーションを行うことにした。



東條 滋 とうじょう・しげる  
数学科・2学年担任  
数学部会研究協力委員  
教職歴6年。同校に赴任して5年目。



須田敦子 すだ・あつこ  
保育科長・2学年主任  
教職歴31年。同校に赴任して16年目。



亀山典幸 かめやま・のりゆき  
校長  
教職歴33年。同校に赴任して2年目。

### 埼玉県立鴻巣女子高校

◎目指す学校像に「自立した女性の育成」「スペシャリストの育成」を掲げ、生徒一人ひとりの学力向上対策や自己実現への支援を充実させている。

◎設立 1966（昭和41）年

◎形態 全日制／普通科・家政科学科・保育科／女子校

◎生徒数 1学年約200人

◎2019年度進路実績（現役のみ）浦和大、十文字学園女子大、実践女子大、大東文化大などに延べ21人が合格。短大、専門学校進学99人。就職37人。

◎URL <http://www.koujo-h.sped.jp/>

考えの根拠を述べさせたりする問題へと段階的な構成とし（図2の上）、「データの分析」を出題した2学期の定期考査の答案を返却した後の授業で実施した。

「パフォーマンス課題では、知識・技能そのものではなく、それらを活

用できるかどうかを測ります。そこで、生徒が学習内容を覚えている時期に行いたいと考えました。また、生徒が前向きに取り組めるよう、パフォーマンス課題の結果は成績に反映させると伝えました」（東條先生）

モデレーションでは、東條先生を含む研究協力委員と篠田指導主事が、パフォーマンス課題の生徒の答案をループブリックに基づいて採点。採点結果にばらつきが出たり、評価基準の解釈に食い違いがあったりすれば、その原因を議論し、全員の採点結果が同じになるよう、ループブリックの改善点を挙げていった。

「研究会での議論を通して、評価基準が分かりにくいという課題が出てきました。生徒の状態を正確に書くうと思うあまり、私は評価基準を詳細に書き過ぎていたのでしょう。簡潔な説明になるようループブリックを改善しました（図2の下）」（東條先生）

### 多面的・総合的評価を 全校体制で推進していきたい

同校における18年度の調査研究の成果は、パフォーマンス課題やループブリックによる評価の実施を通して、

生徒の実態をより適切に把握できるようになったことだ。例えば、定期考査での得点は高くなっても、パフォーマンス課題では高得点を上げる生徒が多く、知識・技能を中心に測る試験では見えにくかった生徒の強みに気づけたと、東條先生は話す。

「モデレーションの際、部会の全員が満点と評価した生徒が1人いましたが、それは成績上位層の生徒ではありませんでした。その生徒の答案は記述量が多く、記述に論理的な整合性も見られたことから、数学への興味・関心の高さや学習内容への本質的な理解の深さがうかがえました」

一方、自分の考えを思うように述べられない生徒もおり、アウトプットに課題があることも分かったため、東條先生は19年度の授業で、学び合いなど、生徒が自分の考えを他者に伝える活動を強化することにした。

今後は、18年度の取り組みをさらに発展させていく。例えば、前述した保育科での「数学Ⅰ」の「データの分析」と「保育実習」との連携や、パフォーマンス課題とループブリックによる評価の実施を継続するとともに、保育科の他教科・科目との連携も強化しようと計画 중이다。保育科長

の須田敦子先生は、こう語る。

「保育科の専門教科・科目では、子どもの発達を数値として捉える機会はまだありませんでした。そこで、『数学Ⅰ』の『データの分析』での学習内容を生かし、『保育実習』の振り返りなどで子どもの発達を数値の面から考察する活動を行えないかと考えています」

また、普通科の1学年でもパフォーマンス課題やループブリックによる評価を実施する予定だ。資質・能力の3つの柱を総合的に測るといふ19年度の調査研究の重点目標を達成できるように、パフォーマンス課題を実施する単元の選定を進めている。

亀山典幸校長は、今後について次のように語る。

「パフォーマンス課題やループブリックを活用することで、見えにくい資質・能力を多面的・総合的に評価できるようになります。東條先生が取り組んでいる調査研究は、本校の教育活動をさらに充実させていく原動力になるでしょう。今後は、その成果を全校で共有し、教師一人ひとりが授業改善できるよう、校内研修などをさらに整備していきたいと考えています」